

堅田エリア

堅田エリアは、琵琶湖西岸の大津市北部に位置しています。現在は、寺院や伝統的な家屋がある閑静な湖畔の町ですが、かつてはこの街に与えられた権利により栄えていました。堅田の住民は、湖の民を意味する「湖族」と呼ばれ、琵琶湖の船の往来を管理していました。堅田の人々は、1090年より琵琶湖で釣った魚を京都の下鴨神社に奉納するようになりました。その見返りとして、琵琶湖での独占的な漁業権と通行権が与えられ、莫大な利益を得たのです。堅田は湖が最も狭まっている部分に位置しており、その住民らは堅田を通り過ぎる船から税金を徴収する任務を担いました。江戸時代初期（1603～1867年）までに、琵琶湖の海上交通の拠点が大津に移ったため、堅田はその影響力を失っていきました。

現在の堅田の観光スポットとしては、浮御堂などの寺院が挙げられます。有名な禅僧である一休（1394～1481年）は、堅田の別の寺院で修行していました。俳人の松尾芭蕉（1644～1694年）は定期的にこの地域を訪れ、その弟子の多くは堅田やその近辺に住んでいました。この街は、詩や芸術作品で頻繁に描かれるようになった、伝統的な近江八景（近江国（現在の滋賀県）の美しい景観から厳選されたもの）のひとつです。その景色は「堅田の落雁」と呼ばれ、今でも地元で作られている「落雁」という伝統的なお菓子の元になりました。